日本絵類考

六

10
75
11

日本絵類考巻六

目録

赤絵　刷毛
絵提灯　うき絵小袖
縫箔絵　縮緬絵
日傘絵　紙織絵
絵暦　畳暦絵
指頭画　絵直し
絵さかし　謎画
千社参　吹き絵

内閣文庫

踏絵

銅版画

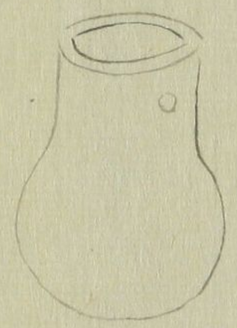
西洋画

赤絵

赤絵指南と云へる元赤絵を誓はんと思ふ先
洞谷の藥の絵の具を能くみがきみて粉を拵
細末にして其後つなき藥を和ふへのとつゝい
ふくゝして書くべし絵ものみても筆先漸々
物へ絵くあるとは都てうそとまことなるへ
筆の先漸々物へ唯絵の具を筆の先ふ
て引てもゝくふうけハきとはふうけもなを
右細絵ゝこゝ書たの絵の具は製の図を見て
拵べし

絃の具製法の図并ふりがらの図

図の如くして藥をこなそつて藥碗にあつて仕方よろしこれはふりがらとして徹底あるふあるべし之へ水をて叶うとも柄をそけ用ゐるなりて焼ハ絃者なり



絃の具藥法秘傳

藥法ハ極秘傳ふして容易みくよ云ふしむへきふ為ねとも不審ふ其奥儀と毒ふして初學の為うそ

黒藥

一 青呂淵 絃の具為うあそ 一匁
一 ろ玉 ロ 六分
一 唐の土 是ハ井上卯の高 七分
右之種を図の如くふして製水を入まて又く物て粘細まふなる時膠ふ水とのまてつ

うわ薬

蒼薬

一唐の土　二匁五分

一緑青（板なりしといふよろし）　七分

一日の圓（黒い次第石の粉なり）　六分

一ちら玉

右の四種を常のごとく製し水にとかしてそこ又水のみをとりてつぎ合どろどろとなる位へ

ふるまして彩色をかくつけ

但黒うて世のうるつく薬をかきたる上へ

つゝ筆先のさきにぬりてふべしぬるゝ

るゝくもゝゝ彩色の射下の黒うきをきそも

けなりをもいぶんも保てぬるゝ

紺青薬

一花紺青　一匁

一ちら玉　四

一唐の土　二分

右製し方蒼薬のごとく水のみをとりてどろ

と解きて彩色をつけ焼あけて本色をかくそ

ちそ

黄薬

一 唐の土　二分
一 唐白目　六匁六分
一 赤玉　五匁六分

右製しうるとき方前の如し

紫薬

一 紫呂洲　一分
一 日の岡　七分
一 唐の土　二匁五分
一 赤玉　一匁六分

光澤薬

此薬を焼らきの上へぬりて焼けハるるしるしを
てゆるるる物くつゆ出るなり

一 唐の土　二匁五分
一 緑青　二匁
一 日の岡　七分
一 白玉　一匁八分

光澤墨揚薬

一 白玉　二匁
一 唐の土　五分

一日の圓　二分

右前ふかし

光澤なし金揚

一赤玉　三分

一唐の土　二分

一日の圓　四分

一信樂土　五分

右前ふかし

赤藥

一べふがら　色い光明ひかりとも　四分

一唐の土　六分

一白玉

一日の圓

右是い藥と解き方口一腰水をてときふのて

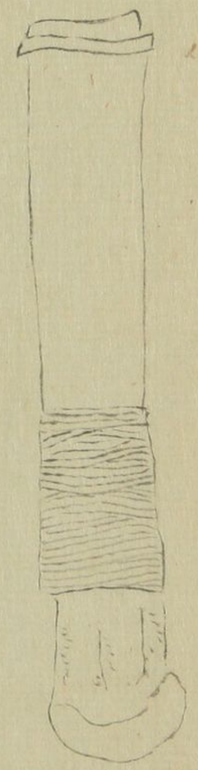
ハ入とへうしく

赤藥製法　水晶みちがらの圓

水晶の形と成くそをて

圓のごとく叶ふをげ用

ゆゑ也



赤茅いむつらしきものなり 紙布焼のふくがら
ハ度く拵るうちのハもとをけて藥をまぜると
ころもとく病なり そもの為 水晶を用ゐること

草色藥

是ハ青藥と黄藥とを合して用ゐること
たいしゝ中藥

是ハ赤茅と黄茅とを合して用ゐること

金屬ハもとゝして本
沼のかゝ藥を買
ふつゝ日方一如よ
ゝて大抵四十日位
なゝを書の走物 図の如く
中拵ゝてけゝつ

圓のこゝろ一

ふつゝつゝ指

の先をもてふゝ

むつゝかもゝ乳

をなでまわす

金箔を以て法華を圓

四ハ黄菜ちや碗をもつゝさて膠水の濃くとゝまる

まふて中指の先をもつて陸くふませ夫をもいつ

まもつて指先をもつて膠水のかゝるくまで指をつ

ねてまいつゝ菜碗へこうさまをつゝき動らぬやうとお

もつてゝる時湯をもつて陸くゝとき菜碗一杯水入れと

てゝゝき少しの間おきてあふき金ハたゝまをせて

上の面き水ふ極細なる金のまゝてあるとそ

つと外の菜碗へうつもつて其のうつゝ方圓の

こゝゝまつゝ方むつゝきうとなて先

右のまふ薬硫をもち右の事仕中指の先にて金
仕水を一ちぶ〳〵づゝ落てこがきて〳〵さて
指〳〵うつ〳〵水にひたりてあらき金の流にて強く
たゝきいたゞきて乾〳〵まゝ初のごとく〳〵勝水にて
解〳〵〳〵最後もはのごとく〳〵して後よハ水にて
金のうそをもちて強るなりさてうの粉〳〵る金
の水と一表水けハ細末の金こと〳〵く流にて
あるなり其の時上水をそつとそて強へかゝる
中と入る勝水とつなりふ入るとて〳〵しかる
い焼きゝへして
用ゆる〳〵

但かゝる〳〵やの加減ハ書物の上にてハ如何ゝ

金ロいつけの法

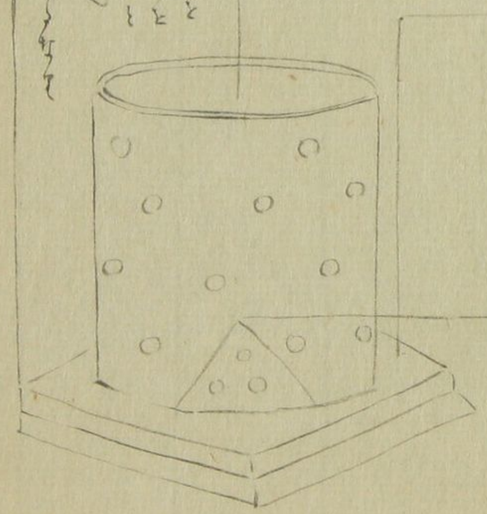
杯のふちへいつけを焼きつけんとなるハ先
さゝつきの上にて能く熱ちをはつくなりたる
時あるとも金業にて杯のふちを軽〳〵ぬるつ
さふあるときれハ金が内外へ流るゝなく
なるなり
焼物所ハ土間にてやゝ〳〵〳〵底根〳〵へぬり天
井と付〳〵さ乾最後〳〵

釜のこしらへ方を雑きるあるとて世ふ出てさ
を次ふ著をと見て知る

釜はいつもけの図

釜釜の図

外釜の図



釜焼方

図のごとくの釜の間へ土を一ぱい廻りへ入れて火にてそきて又其の上ふ大を入れ又もとこの過きて土を入れ限りなくみて釜の中にまて土を入れて支えて炭を入れて火をつけ炭の入れ方のおうふ方にしてのみて末こい蓋の上へ一倍ふ炭を積み上けて其の炭の大ふかさ加減をうて土を引きて其の度ゝ過ぎれい位ゝまてもうふぬやうふかうなりて又焼の前なれい位の具の色ゝ出ぬもの

なりて此焼加減い実ふむつかしきは仕なれでい
ゝ是細ゝきて土を引て直るい出きぬゝ蓋のつ
もりなりて焼る時そつとあけて器と出もつ
此蓋のあつきゝ出もくうくに冷くゝ出もか
んふうゝいる物なりいつけの金いたゝきも
らふて中ゝふうふ硝ゝ限りなく出つる
ものを、

銀焼仕い器むつゝき業ゝ製法焼仕方い後篇
ふくゝ著もて

細がき佃青焼仕方も後篇ふ出ゝもつゝ其外大

四六絳面重冊の數一百餘部 二百餘部

燒付方仕方

刷畫

文晁畫法ハ姚際恒書畫說ニ云 畫華亭山水奉以
光散筆醮墨寫烟雨景不用一點水墨而淋漓盡濕
溫于縑素初視若糢糊細察之無不了然 昔宋元章
對道君謂臣書刷字此純用刷畫矣是渠獨創之格
故志之以爲六法家一異事 ト云ヘリ 刷畫ト云フ
ハ面白キ ヲ ナリ 吾邦の池大雅ナリ 等光散潑
墨ト用フ 亦刷畫ニ ハ ナリ 然トモ 一
種ノ ガ如ク ニ 始ヘテ
稿本畫法ハ今世の書畫 ニ ハ 刷ヲ ナリ ハ

古の飛白書の送仮名なりと云へり図絵宝鑑ふ云宋趙
宣周飛白筆作人物宣和元年徽宗皇帝とそへたり
(飛白書ハ明の書譜ふ上木を重池堂選帖ふ
出てたり)
按ニ和国書家の諸流皆刷を用ひられとこ
ろ毛筆の及ハさる所を補ふ過きに四条円山
流の人書毛筆と用ひそして刷めるもて或ハ
ふ山水鳥獣を画く頗妙なり天保嘉永の比街巷
ニ出て刷のごとくして書画を切りいさぐ者あり
しが車伝ふしてそふ揚へを画ハ天神ハ画市
賣の類書ハ神仏の居ますかなりき今も社神仏の
縁日ハ出てハ画く者ありされと古の如く刷の
ごとくして画くふ所なく其画の筆ハ以上ハ筆を
ゆて画く頗拙なり

佐提灯

武州年表文政年間の條に六年間白き盆挑灯切子燈籠もてはやされ彩色草花を画く挑灯行はるゝようなれども盆前盆中に用ゐるものにて多くは七夕なれば画きたるなり後廣重の考ひ提灯もて行はれ如七仲なるの淋しき画を加へ七夕の花島山水或は美人童児なるを画きたるもあり以て当時の一奇物なれば美濃の岐阜にて製せるもの最精巧にして画振もまた細密にして岐阜提灯と唱へ海外に輸出せる多

一 捏灯の文ハ京伝ノ骨董集ニ伴うあり

めき 伝小袖

嫌避笑覧ニ衣服ニ画トカヽハ古クヨリ有ルコトヲ
ヨミトラヒハ墨絵トカキたるノ流行シテ友
禅ヽて仕いてしノ物ヲ中根久物語ニ白ちりめ
ん長ヽめてふ京の幽禅ノ墨絵の流行人の目ふ
たつ紙ヨミ其ほか世ふ衣裳法度なき
時ヽめ云ヽ元文寛文の比の狂歌集ニ白むく
ふ流行伝めきたる女中の雨ふりとなりて
「白めてふ墨て流行ヽカキクケコ雨ふりて
月ハラリルし口」諸雅大鑑上巻 墨絵の山水宋印

と仮ふつけて曙染の裏と見のゝふくけあいし
西行御留に近年書侍小袖と仕出し儀多浪しか
ゝな

縫箔侍

藤進筆賀ふ景花（卅七本つゝの後）ふきん是うの
もうふきねざくらうんうもものおとうねして作
ゝ枝松なとぬひうるいゝ松うし云
くけの奉のゝ衣服ふざうがんといふる
こと侍ゝそゝ又らうんもあそ（七ゝゝゝの）
ゝかきゝゝゝい縫もの櫻飼なと袖ゝちふ松き
ゝちと白うねの古古のいとゝゝふきゝゝし（卅
一てん上のゝかゝ見）つゝも所うて女房のもかゝ
きねよ高うき つゝそ高なゝいゝゝゝせゝせ侍

ふ（卅二歌合せ）世のふるさんはうふあとはざくが
んをつけて伊勢の海くいさいぢくとあくて
ふねのくるを（日暮）わてものゝ布紙ふざくうんの
かくとをて題の句をきまくふ書たる麻云
く板ぢくうんゝ鐔嵌うておそうねとうつそて
をやくと作りかて底なをまいこをを用ふあ
らを箔と細く截て金をいふ青きざくうんふ
といふい書をふて細く高うる武ゝ撰みくみて
ををくをも為てををくうやこういもと金銀の箔と細
くくて用ゐてるくをのやくふ細くもやくつ

つるをも云ふいひくこくくふ新くるくをものふ
をくふをくざくがんくくるを後世ふいうををの
ゝ石と心ひくるをやゝ侍中辯要ふ下襲夏泉眼と
あて著明集ふふ蓋のざくう又深をぢを
のさくうといくるもくをもの名なるつくと
和訓栞ふいんをくをいがこをなを箔ふ細う
紙といふこと重文ふい侍へていくるこくく又
へて貞享江戸庫ふふ佛師細金居を清細金重
右衛門といくる者あて人倫訓蒙圖彙ふ細金師
諸の彩色ふひる事なをくを寄佛像の絵ふこを

と金銀の薄と細く刻みて文様となし花の形
をもうつし細金師に重師に従ふ名なりと云ふ又
摺細に青貝の粉と薄なりて是即ち箔なり
縫と箔とに上に引たる文ぶくりんをつけて
云へり縫たるとあるらしなり蘭中日記
(東山の御代に年号宗紀)箔を縫物なりしてらふ
云へ云へ五月一日ひるに絵ものしらし
らふ云へ絵文記縫物の細の変男に人よ
十四五もて居れ下へ人に不可者居なり
そへの細の事は前也其人は其は用勿論に

あて箔の細に糸の縫紋なへ金銀の箔もて拵
拵を作りて 中略 昔へ物語六十九年と前女中北方
へいふ細拵へ為者と金箔もてぬ
い一面に松つい義のやうに箔ありきたる細へ
婚礼又に年婚女と男の婚年月きり射に女に北
方へ四へあて松皮義に張見へ云へ
下略

備後絹

備後絹は機械をもて錦織と紫絹一拾絹の如くなりたるものなれはいつこと蓋一天保年間より行はるるもの始て一葛飾北斎乃ち也敷川孝國なるの後ふたゝびもとに戻り十三四年のころより此備後国おのゝ海辺なる鞆出そ其の用は卓上のものなりとそ

日傘図

日傘は兩年ゟ對していへるゝ　即日陰傘なるを去
年ゟ出きてきしなれハいつの頃ゟ始をしら
ず　横進笑覽ゟ負順故實集ゟ引き時ゟの
文四月一日ゟ　八月中ゟ　又九月八日ゟ
さもゝ　時ゟ　ゟ　武　ゟ日傘
の支仗と日ゟ　ゟ本儀ゟ　ゟ
して仗のなきゟ　自然ゟ　ゟ仗
と出ゟ　ゟ　ゟ雅初後ゟ月出し
たるかきハ日傘ゟて進ゟ共ゟ　ゟ本儀

ふあんなまて寛永頃の画ふ小児の年さ勿〳〵
の紋をかきたるふ筥蓋をと作るこうけたる図
あて云〳〵こは書畫一日年画の板なるつ〳〵を張
千代紙なりとて張てそ小児の日うけ年ゐを
近来花井島出なと画き美麗なる日年を製出せ
らは我邦人用ゐるあるを海外ふ輸出せるへ
又大傘にて大なる日うけの傘を製〳〵こはふ画
きたるあて こは亦海外ふて行〳〵なるを

代代紙

文晁画徳ふ閨中代代紙画山水花井鳥毛皆工設色
亦佳或言近日始刷為之全按留青日札嘉靖中設
入蔵書家賢有割糸衲代代尋画之名則其来久
矣〻演洋山人の分甘餘話と云ふ余亦一路栄華
の図を為せ為せ 補画と〻〳〵別の云説あ
て

修暦

修暦は修をもて暦日を新しくするなり一ふ育暦といふこと文字を解きそこなふ作なりたるものなるはいふ注奥の南部にて奉行を故ふ又南部暦といふ南部家にて製作をしめ領内ふ頒布をしめるものなりといふ今中教育の道大に開け全国到る所暦の文字なを解きさる者のあらざれと南部にては今往時ふ奉ずして考るものあり

按ゝ往昔南部ふ育心修にて心修を重ずてよま

ちなみに即般若といふは般若の面を画き波羅
密院といふは姫鶴の四を画くの類なり

略暦法

略暦の画は明和天明の頃より行はるるものなり其格式は縦六寸横五寸を以て刀の大小を画き
横目録下緒なりとふ大小の目を板にして又子の年
ふ鼠二足を画き一と大の目一と小の目を表す
なりとは類なりしが後ふ人物鳥獣なと画き彩
色極めて其形象中ふ大小を表せ又は話の文句
法中ふ大小を現はし美義なるものを製しなり
こは因りて美名ふ表はし好事者競ひて
工夫を凝らし格を出て春興の一景物ふ供せ

指形亜

指形亜一ハ手亜又琴亜指亜巩亜即指甲ととて亜〳〵と〳〵

好古日記ハ巩亜香祖雜記曰鈕玉樵琴云有王秋山者工為巩亜凡人物樓臺山水花木皆干紙上用指甲及細針挑出濃淡布境淺深一法古名亜按琴書作巩音築字書以手琴物也中年巩亜ますこと見あて伝ハ指亜ともいハ竟亜ことゝう祖とも

四朝亜徴録ニ姚京紙亜自山水人物花鳥虫魚蘭竹以及指形木片西洋編紙等麤不工

讀老日札 安西雲煙著

西河合集と陶簫指頭引曰皆以指頭行之又曰推輿吳南章藝苑日涉に佩文韻府唐張璪以手作畫是指頭畫之源

僧雪舟傳に初時拜伝授を事とせしに圖畫摸写するのみ也と奪ひ之を師僧ちふ怒を之を奎樣ふ傳しかるに雪舟畫法を乏指を湿し筆の図と様相ふ畫しふ其の妙生氣のうつる却て筆畫る物ものを師僧見てちふ驚嘆し遂ふ其の傳をとゝゝ評して畫法を學ひしむ

藝苑日涉に池大雅指畫ふ巧となを書て人のたゝふおもを似る仙度仙人奉坐ふ如て曼妙名ひて曰く嘉卿傑邑筆と之しき所ていい赤宝ものを一しを大雅ものを聞き方ふ愧ちて終身この技をなすこと

画真

画真とは無心にして俯向く一つ二つの点畫とかゝこゝに把くことゝ筆とをもつて諸物象の画を為すは古くよりあるなり我国なるに文化八年この方に画師として行はれ点者と撰ミ画題をうけ甲乙を定めて露本の中のうゝ形ふ昔飾北斎天保飢饉の世なるあるを内筆画帖を表紙にして画帖のうちに合ふ供ふ供ふ笑ふ笑ふして画真と名づ故者と呼ぶの工夫を案出せて其の法は俯者俯者ふ揭ふ

恵春と請つるの先つ筆をとつけ其の面
ゝ点あるひは線をひきこれを米一粒をとゝへて
蒔けるとゝはかるとゝ蕊をなるゝ其の像行ひし
い点をとゝ〳〵筆を洗へて稚〳〵のものを恵
き典つるなるこゝを投米金〳〵清つるものあ
らをひ毒を一日ゝ米二粒を得ることあて
〳〵嘉永年間江戸みて絵なを〳〵行ふ暴ゝ
京師もて行のと〳〵其者を撰ゝ甲乙をあ
らをひ名を今其のゝ佐春〳〵一筆を得られ
い春ゝ歳を一二年歩金立六の古人を絵なを

〳〵の戦ゝをなを〳〵ゝあを其の世社顕い花の
こゝゝなりき

絵さがし

絵さがしハ一重の中ふ鶴き他の形象を描出さ
しむるものにて一見一物なるやうなれとも其の中更ふ
物あるやうにて童児共集りて之を探索しむふ
を称ふ絵さがしといふ古人既に世の重をつ
くるものにて山水中ふ幡蓑等ハ人物なるを
描出さるあるを好の頃なりとて始めとなるふ
そをうろ坊間教育絵さがしと題し種々のさ
うし重を刊ふふ勅を求るものあるを童児の玩物
としてなるを

謎亟

近頃謎亟なる行はるる即學校なるひ生徒を亟き小學校とうけて其發のかん德利と解くうらいい裡とをいて通ふの類なり謎亟のこと亦洞源ふるる南藪百幅圖を閲るるふ裡と源を亟きて一名南翔と題し一書の序に署して朝班と列るるを表しるる桃李ふ四藪と亟きて及ぶのを北朝廷るを沼妄と稱るると表しるる竹に物を亟きて一名圖と領るるの類らと亦一の謎亟にして其の表ること古し

千社参札

題名功德演説と曰へる題名は至て大なる功德あ
る事なれども其功德を慎て名を書て堂社に貼
する時は長久なる堂塔を通て長寿の祝をなす
て信心の体なり佛神に達し佛神を信ず感
て随意深き考ふ深き願名を参詣恵名とも
なべうるに成る時は出て願をなすこと
書て箇所をもと考むる名をなすこと例れを
禁ずる方へは願をなすこと願名には姓名を願
し署する名にて名牌を貼ることなして再遊して

旧道と思ひ出を助くるあるいあて現流の事とし
中華のい古昔らを以事あを唐の地ふかなてを
て盛なり既ふ韓退之の文集うも載そうて我邦
人皇六十五代の帝花山院頻ふ考うね世を感
しおもふ法在位そつうふ二年ゆて修ふ万象
の法位を棄て剃髪法衣のは多となうせたまひ
入覺法皇とそしてなる仏眼上人は導師となうて
西国三十三所の観音を巡礼したまい其後国谷
河内て礼とお納めは帰京まうくけうあう衣
熊野権現法皇のは参詣ふ立うまい君仏を信し

給ふこと厚きまふうて我此世ふ現ー俗ふ仏眼上
人ー願ふ者を法導き申なて新堂ー海内をんふ
京生我洞ー三十三所年ーんうをい一名い西国
三十三所の霊場を巡て修ふ我社ー年ふいを射
潜を三度ちうて拝と寺ーーと年ーたまひ権
現ーうまけきううーーを参ふうれい納れしい
ふこと此のは射うて権興をて今の世れ西国坂
東四国八十八ケ所弘礼俗行の起を諸氏法皇
の法俗行を又ふ神仏霊場ふ願参ーて納礼
とる事ーハ中うーーあて睡餘小録ふ云西国弘礼

[illegible]日蓮上人の書[illegible]を日諸國の親書を拜[illegible]
[illegible]の一西輩茅庵を叩きは下吉[illegible]
[illegible]札を[illegible]
[illegible]天恩又世大福の基を[illegible]
頭石俗札の支部遠近流布して諸人先[illegible]の
輩ふなしい信者日を追て信仰文化年間ふ[illegible]
初年稲岸迄を已待年天迄を地蔵迄を八十八ケ
所頭石俗札[illegible]三十間堀銀市の家[illegible]頭
石の人[illegible]養[illegible]されも世[illegible]俗札文易の
事ハなりをしが其後上所格[illegible]山[illegible]集[illegible]を

文政[illegible]を連[illegible]と[illegible]接連一と連
[illegible]法連撥宝[illegible]連已連生[illegible]連なる[illegible]て頭石の
札卯と同[illegible]を或い東海道五十三枚後三社迄を
事の連札を製一下石[illegible]中[illegible]福山といふる[illegible]亭
して[illegible]札の事を[illegible]て天保の[illegible]も八角連○○
連[illegible]びして[illegible]札の支[illegible]の頃の
集合所[illegible]周の[illegible]永[illegible]尾[illegible]亭
今川[illegible]山の井[illegible]東[illegible]亭[illegible]砂[illegible]亭
[illegible]東[illegible]亭神田[illegible]所[illegible]亭
亭下谷[illegible]丹[illegible]亭[illegible]市一本[illegible]亭

千社詣併札控之文

信心と雖所々に名聞より札を張るべきなり
活業成ずとても遠ざけるべきなり
皆札より手を出し新規と競ひて考を加へ強ひ
ても
神佛社寺に詣て言葉を悔らしに落書をこの
らん
集会の席に喧嘩口論形て物騒敷なるべきなり
又と偽と堅く御守信心拝礼なる輩は神仏の冥
助著明諸難諸病と免れと世の大病と変治領成

然如去歳は是疑いあるべきなり
嫌悪笑覧ふ千社集は明和七年頃の江戸名物繁
昌笑覧ふ千社集は安永は方社ありて神社のと
ふあるは佛寺なる諸も千社参といいいる
いなて勧立吉といいいる其所あはるるの者
多市をもが札は文をとい書なるみて板なて掛
てるるよいあるは是ホい其の徒の中なて落
あるもたるものなるん唯人と知るも然を病
とそいと益なき戯なて
抜ふ頭右如德隠流は怪翁田定賢といいる人の

著述なり中に天愚孔平の事を載せ曰く萩所氏
名は信敏なり鳩谷求之と云へり又天愚一名孔平
と称し儒として雲州侯に仕へ壮年にして四方の
神仏に詣て願合へりと云へり帰て遂に千社詣
中興の祖なりと云へり（百余歳にして歳てあり）千社参の
礼は其の始め文永の頃出雲国記
なれば異説なり（後世と印刷に云ふを見る支と
なりしにあらざるべし）納札睦連なるべし納札とは
ものあり今の願印書と呼ばれる花ふ録
も

納札睦規約

第一條 都下神社仏閣例札信者等ヲ以テ組織
シ例テ汎ク文涼親睦ヲ旨トシ信者一般ノ隆
盛ヲ計畫スルモノトス
第二條 前条ノ目的ヲ以テ毎月例札会場ニ来
會ナシタル者ヨリ金五銭宛拠金トシテ徴収
ナスモノトス世話人トシテ五名ヲ推撰シ例
札睦事務百般ノ整理ナサシメ毎年三回解任
改撰ナスモノトス
第三條 月掛金ハ毎月日本橋区田所町東京銀

行ヘ預金シ左ノ項目ニ支出ナスモノトス

諸山開墾及ビ道路等寄進奉納品ノ外ハ其向ハ中近ク依リ世話人ノ招請シ採否ヲ定メ奉納寄進出途等ヲナスモノトス但金三円以上五円以下ト定ム

加入者中罹病者ニ慰問トシテ送金ナスモノトス但シ罹病二十日以上外泊ニアルモノトス

加入者中死ニ於テ死亡者アル時ハ香料トシテ送金シ親族ニ渡ラス一般会葬ナスモノトス但シ本人両親妻女長男長女ニ限ル

送金高ハ金二円五拾銭ト定ム

加入者中類焼者アル時ハ慰問トシテ送金ヲナスモノトス送金高ハ金三円ト定ム

其他共交通上ノ事故ハ世話人一日ノ招請ニ依テ一般ヘ報道ナスモノトス

第四條二ケ月ニ上来會ス之時ハ前条ノ權利ヲ失フモノトス但見舞ナク尺撰金ナス者ハ其限リニアラス 来會月撰徴集者ハ月ニ壹銭ニ署名シ置クモノトス

明治三十二年九月

俗札睦世話人

納札睦世

吹き絵

吹絵は白紙の上へ種々の形を切抜きたるものを載せ其上に墨を吹きかけたるものを吹きて書の如く墨を散らしめたるものと其形白くあらはれたるものとあり吹けは紅葉の形白くあらはれたるの類なり小児の親しみなる法なれは頃ふ金ぶらとなる刷毛にて墨を散らしむこと是吹画の首唱なるへしもとより吹き画と称し神仏の縁日などにて其器具を書生などにうりあるいたり

按ゝ雖進笑覽ゝ水と吹て墨ゝ文字と如くこと西
語ゝ金土產ゝ法子（かぶで）ゝもの藝といふ文字ゝ相用ひ
し亟十七歲新人形とゝ形とゝ つゝしきは此不くち
ゝ水と吹出し墨ゝ文字とゝつゝしきは（祇信ゝ
信ゝ女ゝ進女水と吹て文字と寫ゝ易ゝて）とゝ
吹き亟の說ハ蓋し亟華ゝ亟ゝ考へ出
たる說ゝ

踏絵

踏絵ハ刑ゝてフミエ天主の像と畫き諸人ゝ
てこゝと踏ましむこと耶蘇教禁の沈長
時其他九州地方ゝて行ひしものなりとそ餘未
弘菴の踏絵の說ゝ踏絵と云ものゝ寛光云の末年
若くハ寛保云の代ゝ行ひしけん寛文十五年天
草平定し日十八年英吉利人の耶蘇教と唱ふる
者と平國ゝ通じ保ゝれしが是ゝて後ハ此教
を禁ずゝて此踏絵ハ設けらるゝそハ長崎
の奉行ゝ他九州地方ゝて宗門ゝもゝめの時ゝ

彼人立会ことを諸人ゟ踏絵をもとめ此ゟ耶蘇
宗のものい踏絵をもとめ其ち補修されしを今
現に博物館ゟあるものの大小六七面あり何れも
真鍮の板金にて出来たり但し此人物い耶蘇
或い耶蘇の母マリヤの像を磨滅してきたるゟ
ゟ所々ゟれと大方い知られたるゟ別紙
写生板にて掲ゟる踏絵の図い写本視聽草中ゟ
あるものにて大さ縦六寸二ゟ横四寸五ゟ
其の紀元の如し　真鍮にて作る像の厚さ五ゟ
涅槃の面そしゟ見るに　これも赤銅さ五

ゟ紙絵い彫ゟけゟて多て作りて此絵廿五枚ゟ
ゟと云ふ其図ゟ所々異なるゟ中を幻ゟ
幸前図中絵と云ふ所ゟ漏年の宗門改めの変
あて其の姉いいつも長崎の花ゟ鋳借して
板を絵のえゟる程ゟ切板て其上ゟ面て踏ゟる
と云ふ此ゟい蒼沼定之の其変ゟ彫そし此写を
ゟなりと云ふ文化元年二月廿八日鍾下写中邑
病氏　西湖志四十八李衡改天主堂為天后宮碑
紀　今日本於海口收港登陸之處鑄銅為天主詭
像抵其國者不踏天主像則罪至不赦夫既為天之

主而変海外一国如是蹂践殺戮辛亦無如何其不
能禍福人明矣云々

銅版画

往年叢徳集へ二本邦にて銅板画の権輿は亜欧
堂田善なり田善は岩代国岩瀬郡須賀川駅の人
なりしが此は駅の内蔵頭耳氏なりと其書付なりと
て一篇を寄せられたり曾聞て所ふ者所にて之
を能きん田善なりは姓の永田と名の善吉名上下
を有きて之を書て亜欧堂とは亜細亜欧羅巴二
洲の如くなりて其家とも俳諧を業とし
て又と昆山とも号て善く山水人物を画く田善如
き世なりて画法を又よく業精成て石文鼎の画

を謂て概如しして嘆して曰く市隠者と称する
も新人に過る事能はざるに志うに新板軸と出さん
ものいと出たるを得ざるを嘆し題得る所ありて
其名御用星に題する国て漆戸の業を井集に譲る
明に一業に取て冊書を著して業とせれば世時陸
奥国(今磐城)白川藩主松平楽翁(名定信)賢明の聞
へあり田善の重とする事を嘉して江
戸に招き自馬江漢の門に入て油画を学ぶ
是蓋し享和年中に方りしなり乎翁偶日曼殊斎
及び国華と号する銅板数葉を斉蘭人に得て乃

之を田善に示し之を田善見て大に感し日夜刻
苦工夫を凝らし遂に模刻して楽翁に呈すこと是
実に本邦銅板の始なり楽翁頗其技を賞し蘭人
に倣らんか若に浅草山乃江戸名所の図と
鐫らしむ依田善也倣に銅板の法を講し其
技大に進むと或いは乎翁に計て江漢田善
の二人を蘭船に招て欧洲に渡し彼地の山川
風俗と図画し傳銅板油画の術を修せしめ
時海禁頗緩に及もし奏露に家を立て宗を震
その恐あるを深く手支を絶し世人をして之

按に蘭人伝に云ふ
長崎に于て高野図を海外
に出すこと多い嚆矢なりき

と知られたる元来乗蔵は田安家に生れ出でて
松平氏を嗣ぎ人となれば藩中と云ふ様と之を知る
ものあれども乃ち神社を祭祀して病魔を防ぎしことを知る
なれども此談話は耳相傳て口碑の老人中にハ声と
変じて之を話せるものあるべしと云ふ却説田善敬ふ
遠ふ倩て明治の世楽翁と称して士林
に列せり文政五年壬午五月七日病て死せり年七十
二歳其造る所の油面は世ふ傳ふるものあり
白川駅に鹿島神社ふ掲ぐる額ハ個奇なり
川駅と全むの間にて享和二年の作ふ係る須賀

川の諏訪神社ふある額ハ略前図ふ類して文化七
年の作なりと田善今を距ること七八十年前ふ
あるて本邦第一曾有ふるの技藝と称むと会
人の之を知るもの解なり声名白川国を出てさ
ること明治九年秋写東巡の日田善及び浸ふ油
面二面を行在所ふ掲げたるふ吉田者ふ買上
あるこれを其名頓ふ遠きふ等へ寸徒ふ伝ふ
てこれを孫義ふふる田善ふ造る所の剣刻
多賀神碑及び白川名所図数面の版ハ今現ふ内反
順耳氏の家ふ存ふて又田善ふ香材といへる面

家ふ接けて　佐貝の法なりとて右仰國表松なる
林年治ゝいへる人の家ふ伝ふる文政元寅七月
十七日製ゝと云る也　一書あり今是用ふ那さ
ゝへけるとて　往付をあらんかめをふ付ふ揭
一生丸ん　三分　一ゝつゝ　袋入
二分五ト　一白蠟　二匁五ト　一なりて
三分　一とゝがゝ　中三十本　一とゝ
ん　三分　一京の油　三合の割　一棒紙
二分　そい樂ゝて法ふのる初ふ
但　白ハ唐の土なて能ゝて入赤ハ蘇香ふ

で黄ハ黄ゝ黒ハ黒ん　たいゝゝ紅ゝ
保ハ赤と黄と交る
右陽ふへて後ゝ煮え立てゝ冷ハ而て四ゝ度
ゝて半日とせん　つまて其ハ赤ハ　さて
歯の如ゝ後　後ゝ陶器ゝふへ入　何ゝて墨てゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　右脇ものいろてのゝきへへ入

西洋亜

西洋亜の我が国に傳来せしは天文年間西班牙の商船九州に来りしなりとされと確証なしと雖ども又書冊にも記載あるさまは知るに由なし慶長年間伊達正宗の信文倉六右衛門羅馬に使し亜の肖像を亜にして持ち帰りて聚楽遺址の肖像と共に伊達家の所有とす（聚楽遺址考）

亜は亜墨利加の略称なるも我国に傳来せし西洋亜の最古なるものは

嘉永年間江戸市中に於きて放出せし

なりと者なり幕府為に一揆の殘党山田吉次郎他

といふる者を召し西洋の画法をもて教せの状
おもふに出刑の始を画らしめこれを品川千住鈴
宿板橋の四宿に掲示せしむ（国史眼）この画法一今
華族大河内氏の所有となる（存邨氏伝京保年間氏の伝）
浮世絵師奥村政信西洋の画法をもて浮き画を
かき出しもて天明年間鈴川長春法画をもて
武場をえの道具を工夫もて（法画の傳宣政年間出つ）
司馬江漢和蘭人に船き西洋の画法を待ち西洋
画法を著いもて江漢の門人田中義去西洋画を
著し銅板画に長もて文化文政年間菊師北斎

西洋の画法を著し油画を画き其の法具を工夫
もて華い彩色通に詳なり其の後鈴川国芳西洋
画を著し其の画法をもて二十四孝の図を画き
出板もて古来西洋画を著したもの此の如くなり
と雖銀国の世宮島に西洋画家の画本を得る支
ちらいまも為に僅に船載の法入鈴なるもまた
なきて これを陽本もて故に其の画く所羽板
画ふもるもの多くして油画に出るもの稀な
りの有名なる円山応挙おもい石文晁なるも皆
西洋画を著しもて応挙は毛筆をもて何に船載

の寫生を学ぶ東京師範学校教授となる文晁は和蘭のミキルデルブーリを得て大ふ称賞となり所謂文明法の世となりて西洋画大ふ行はる高橋由一川上冬崖吉本三平の徒輩出して其の門流頗盛なり其後佛国ものして画法を研究し油画を学ぶ去あて帰朝して今美術学校の教師となる

西洋画法 一西洋は亜細亜日本より西ふある国土をさして世界と称度して量る所いと三千里なる海路を渡ること一万余里程なり其遠き国を亞羅巴と名づけ世界の大洲

ふして日本の如き国数十あり其一ふネーデルラントといふ国七州保ちて一国なり其一州を和蘭陀といふなり彼西洋の画法は皆此風ふして蘭船商らして来りて今日本ふ伝ふる者多し故ふ之を称して和蘭陀画といふなり彼西洋諸国の画法は写生ふして其法を異にすと和風清風の画を似る者は甚寡稀の事として学ふべきもの少いも法もへきの多くなく画といふものふ大らかなる細工みして似たものなりといふものあり是なるふ仙人といふ精妙なる微細のも

のとり和漢ともふ細工い皆細ふして毛髪
髪森の如き一毛つゝ揃きたるかなを西洋の画法
ふして毛髪と揃くよい一筆ふしてこれとをむ
ふ細毛の如く一筆ていい筆勢筆ある物つゝに筆い
ゝ画を作るの器なを半を画て半の色と表ゝ
きして筆点のゝあるい一点の墨を半ゝたと
へい医の病を治るふ薬を以てこれを治そん
ゝゝふ病の発起るを研を知ゝきるゝゝ
画も亦日理西画い唯よゝ遠近の色と表るのゝ
和漢の画い総物ふして用とをなゝに西洋の法ふ

ゝ和そていい濃淡を以て陰陽四四を近遠深浅とをなを
ゝのふて真真情を摸ゝを文字と用をはゝゝを
るゝゝ文字をゝて法ゝを其形状ゝもていい画
ふゝふゝきれい和ゝゝ故ふ他国の書籍い画
国とゝて法き知ゝるゝの字ゝ豊和漢の画の
ゝゝ酒迫の一具就兼就状となるの比ゝん
中ゝふ実用の技ふして治術の具なをたゝゝを
人奥骨ふして蘭書中ふ伝記ゝを印度画の海
島安貝那ゝつる島ゝて捕へ獲るゝのふして
其の島ゝ人其生る形状を摸字ゝ其の物い薬汁

ふ野へたる安貝那ハ淡南杜毛南領ふ〜て後河
蘭陀こうと領と人東の国と野へたるものとを
見るふ色海と形状ハ彩毋とをてこうを彩を
解説を設を支を野へたるハ年月を経ぬるハ
其真と考ふ亜国ふ有きれハ其の真を知ること
と能をを人東の説ハ大概成著わをこと亜ハ真
の六物形結ふ洋学を
ふ有ふきれハ用をなをこうを
一西洋亜ハ油をを際ふ搗ふ水よのを
をを抜をを世伝ことと油亜をふ亜法ハ我日
本ををを伝く模製をものあをを去を志を得

き者多〜余曩ふ時陽ふ遊ふ河蘭陀人イサア
ク、チツヒンキなる者余ふ亜物を贈ををコンス
ト、ヒキルド、ブーリと云る書なを余ふ於て渝く
ふ〜て往返とある今ふ知てハ経横ふ〜て志め
都く所業ことふ高を山水花鳥人物禽獣亜く法
ををと〜ハこを部〜思ふ亜ハ博覧多識ふ〜て
文字を能解をる如をふ有く〜ハ雲ハ鴻丁の属を
て小雀ふ知を目啄雨翼を知ふ有をを其の説と
形物をと異ふ〜て其時を別をを那毛の文彩本
為を文字ハ唯墨ををて亜をなをのを其の形を

なりしに西洋諸国とまじりて文字の上にも六見国と
なし國用となりて版籍の券に記するに紙を
一世人は西洋画をもて活画と異なる業なり
抱腹に堪へざるなり
画は每にいと妙
写真よりあらされは妙とする
ふなりしに又画にもふなりしに其の写生
は山水花鳥草木昆虫の類を画くに每見新
て画く所の品物悉く花動するが如しこれは西
洋机に乗られはいさしらず妙と写生
をなす者にかの和漢の画をもとはは諸ふに見

の論ふにて画にもふなりしに世の人其画
にもふなりしものを平生眼に用ひ故怠
慢なる西洋の妙画を見て却て一種の画にふ
し別に活画なるものとしきと
いふ解をするの器にしき
一西洋書中に画図あり皆洞板画なりて画をもて
文字をはなりて草木の書あり本叶新図形にあり
さはは其真の雛をなす舞器を作るに図形に所
さはは其品物を形むこと能はず能画の画は写
写ふにて之画の法あるて物の活場をもて作る

う物より銅に刻する濃淡を施すこと難し形ふ
昔は蘭書ふアンプルヒットーニウス所を此書
は独国の本草なる今の銅板の術ふ巧なりとする
と雖の書物ふして図形を粗なる真物ふ似る板
ふ蘭学の社中なる者は医術の為めふ学ぶもの或
は重と為すもの徒に対し僅らに少て河前
陀書ヨンストンの生物の説を始め近年商船来る書中
に重い銅板の法ふ録せるものあて其精妙と
云ふべき為ふ真ふ近る為ふ傳彩を翻訳
せるは誠ふ大幸国として表へ捜索られは其

方を通暁せる者ふして年ふ一度ふ重法の妙要なる変
を知らんと為ふ和漢を知らざるものは為其
理を解せる能はざる故ふ以ふ之面の法あ
る分解して其一面は素白ふして之日
は面ふ照る所と一面は深くして日の斜ふ照る
所なる一面は濃くして之日は影ふして暗し
其濃淡を刻する則ち罫引して罫の一重なるは淡
く罫の二重なるは濃くして壮年の射深保平賀
氏なる者話ふ往年河前陀人独国の銅板数百枚
箱に為て日本ふて之をいさぎん与ふ而

其頃のくに〻い浦〻敷て之を奇巧ともし怪ふ蘭
人ふ友そ日本人彼国ふて板を銅ふして刻もる支
を知ふさそしふ支ふて敷て知はそ無ふ銅板
ふ刻もる術を模者もるものなりしふ河蘭書
ボイスといふ人の著を書中ふ銅刻を彼る技の
法或あそうをふ我玄澤大槻氏と謀をて こはを
訳し天明癸卯歳竟ふ此製作を考へて創製をそ
然はとも彼国の工技となる者亜細亜の人と雖
も異ふも其難妙なるへうふ子天資愚頑且年
五十ふ過き氣力衰〻喜ふ此ふ於て河蘭奇巧の

術ふ銅刻の法或を執りて世の好む者ふ授け天
さんと欲ふこと志ふそ
一西洋の重法ハ理學を窮そうれハ是を究そ
もの容易ふ及ふ能はさるの法ある
ふ於ても彼国皆頼となる機械ふ彼ふ学むと会
正面ふ対て物もて重中ふ天地の界あて こはを
含むとうふの中心ふ則五六天を去て
へし書を著作をもて真を発もふ小面ふあて
てハ錯ふうつしふ彼国の法なて
一彼諸国の政道ふして重賢あるしハ右巻の人

の表面を擦りて後世に伝へ生存の物と写照して
て相似に到らしむる者なりとなすに甚だ遠
からざるべし。和漢の画像は真と写さんと法あ
らざれば画像を図して形容を画くものこれ
なり。故に画工者真の図形を写すに真像を
伝へざれば甚だ物なきなり
一和漢の画法は真と写さんこと能はざるに甚だ
所以は凡円の物を画くに縁を描て陰陽の形と
を中心の推き所と所心に能はざるに画もと筆描
きて教をたるものあるに日の蔭なきを教る西洋の

画を作るの法は西洋画法に部に著す事
按ずるに西洋画法中法と解し難き所あるを
なるべし其旨意亦毋徹きざる所あるは大要を和
漢の画は画ずるに真を写さんとする西洋画は即ち
画なりと明ずるあるも唯写生の画の
こと知るべきあるべし和漢の画理を解さるものは
如何ぞ法を作るに当りて当時
文晁画伝に近世唐山にも泰西法ありて
画くものなり則ち東員の耕織図浪華業花
堂孫毎のその画徴録と所謂の錦板印場臣工と

四ツ之のなり〜〜 杜他翻刻のもの二種とす
官板ハ亜鏞ふ亜鏞者の名と刻し黒色とわ
らさて則（欽天監五官正焦貞亜鴻臚寺卿臣朱
□圭鏞とあて冷枚ハ万寿盛典図及ひ馮汲ニ
六仙図陳賢ハ白衣大士像周邦新ハ四道士像の
類なて明時利馬竇庫山と書てしらて泰西の亜
法を傳へたるなり〜〜好古者ハ雅言ふあ〜〜
〜〜てくらきれとも真の西流と學て種に揭ふこ
〜の証ちを知る古人の糟粕を誤て斗庭たるこん
〜〜いて翰者ハ風とあ〜〜或ハ泰西の法ふし

てて新奇の癖を亜き出ちとも一見識者の仕業
なり〜〜亜徴録云焦秉貞浙寧人欽天五官正工
人物其位置之自近而遠由大及小不爽毫毛蓋西
洋法也中国白学村業者曰明時有利馬竇者西洋欧
羅巴国人通中国法来南都居広陽門西晉中亜其
教主作婦人抱一小児（是則シヒトマリヤの像ふ
る〜〜シヒトハ聖なて マリヤハ婦人の称なふ
聖母と訳ちるのキリストの母なて本邦の俗
誤て観ム鬼ふ母神称ハ観音ハ観ちるものなり）
為天主像神氣円満栄色鮮潔不凡（こと光玉板義

面らを油小絵具と加へ重ねる類なり（）音曰
中國絹紙亜湯面故無凹凸吉國素重注陽故四面
皆円満也凡人正面則明而側處即暗處謂黒新正
面明者、顯而凸矣匡氏得其意而表迫之盛非雖貴
也好古者所不取按凡人正面則明而側處即暗
云この説ハ少〳〵盡さるゝ似ると泰西の画
法其正側に如〳〵いとゝ日ふ向ひ日ふ背くとを
もて晴明とするとこゝ西土ライレッセ
なる者の著せ所大画傳ふ詳ふ説き唐山の人
の泰西法ふもとて画くとゝふたり凹凸法

法をなるのを日と一方ふ向て一図を画けるも
けふあるとなるゝ〳〵こゝい得其意而表迫をる
をのなるへきのを真の泰西の画法ふあらしに揚
州畫舫録ふ張恕字近仁泰西画法自近而遠由大
及小毫釐皆准法則金泰西人無能出其右是則荷
蘭のヘルスヘクチウしいへるものふて差ふら
き佳〳〵上をのなる〳〵国画宝鑑ふ西蕃画佛
像多画於布上作奇形詭狀上用油油之こゝ則ち
なるふ佳なる〳〵むら〳〵エンゲランドふ兄弟
の画工あるて氏の油画の法を立て仕出たるを

し去る年春入貢の加比丹ドーリ語りき国ふい
とくむう〜ギリイキス國アレキサンデル大王
は皇工セウキレスなるもの技をて國王ふ巧み
なりて曾て大王の命ふりて葡萄を植ゑ〜真の
彩色飛状花無きして真のう〜ことを強ふふ
概ねきい家邦の金馬ことをてをあるつて
真のふど〜なりとして相爭て毎ふことを喫ま
んとをしなて相ま〜二人の王ありて一人
をアペッレスといい一をバルラシウスといふ
セウキレスと共ふ王をうつて財ふ右巻あるを

ふアレキサンデル大王の寵顧を受〜アペッレ
ス暑を世ふ右たう〜後世尊て王王と称を壮馬
を〜てこ見を見せ〜むとい〜ふ邸踏〜こをふ
をきて会をんこと数ちるものの〜ハルラ
シウス曾て大なる王板の〜へふ絵幔の水を点
う〜セウキレス偶いうる笑ふ入て後ふうの絵
幔を掛けん〜〜既ふ〜て其の王なりと知りて
大ふ怒て〜ことを賞美をりと彼徐遜王板ふ絵奥
を低りて岸ふうけて白術をまつて成老りて絵
を周淀の陸ふふ王〜ふ生絵為りてて〜こをを跳

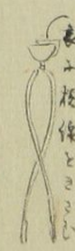
る画図の巧神に入て妙を極るに至ては百図を
へて相ひ似ざるなり
蛾遊笑覧に油画は西洋の画法にて今はこれに
て書るものを画ふことなりと貞徳の安部良加
須ふかしらも賤もぬるるをりをり（其句の因）
獅子踊ぎくきてもかいたるはなり俗ふぬる
も左るに油の光澤をいふなり〳〵法也と紙に
るものも西洋の画法なり唐山にてこれを遠視
画といふ然こなるを今いふも西洋のことに
倣ふ大清朝後図なるを初め磁器の彩色なる山

水遠景にこの法を用ゐるなり
按ふ昔飾北高所なる画の絵具を工夫なる其の
製ふ彩色通ふ義をなりて古人油画を為らくふ
先つ其の絵具を工夫をなるを得もその幸者
の秘密ふ知をしかるなる書格由一民の履
歴書と云るふ日民のなる格ひまく絵具おもし
画筆ふ完全のものなりて頗る苦心をしを
しを敷をてあるを今録して後進の士ふ示をて
いそ〳〵由一ふ著書洞庭〳〵入業〳〵なるを天ふ
も拙なる油画なる説ることなきをふへふ先業画

學面負西國殺ちゃう異人の襟ふ玉飾をを掛け
たる西洋石板面と樽をして立つ面ふ改をる
ものゝ〳〵下石は病院の眼鏡面ふうけ金
きたるをえて立ちゝ入をめる巧をを如何
ふして日本人のまふなる洋ちうと感ぜしい
ゝ出きをふ曲國面ふ過をて其重法ゆゝ彩料
調製法等と質問したるに下等及後口樽をう
けたを其のまゝこをしさ涙をなりき丈らを
油漆ハ工ノアブラヤギとミツダを混し数日間
其の器物ふガラス姫ちを冠ちを太陽の光線ふ

さらし彩料ハ在来の粉末をとるるらを絵る
ふハ〳〵〳〵幾と小刀をてゝとゝ前をきく西
洋庖丁の古物を買ひもゝめ研きて磨くゝ代
用しゝて出うして絵をあけたる彩料ハ金具を
備ひ麦漆をもて巻を目をゝつけ絵屋ふも
ちゆるいろねなるものを戒をてゆゆしくむき
ちゝふて彩料の抑しくちゝなを等ハ像
たるひふをカしつゝ魅厠しゝて丈ゝを漸しく
亜とまなひ写をふ以ゝを文色板の仲用ふ利
用四の手きを仕をしまゝ祖製行燈四を用ゐ

うかべての代てふ竹かわらひを削てさら
い茶紙のうへへべら廻東庵十の古物筆ゐてき
布地を幅ろうろふはせん鋪の焼形と買ゑて
上部の丸形ときり下図のうへうを
此の代用品ととらてきてさて又油絵の筆刷い
市中有名なる筆鋪わらい刷師ふ託して造ふ
ゑうふも毛並整うひて粗毛等ちてて不便と粗ゑ
たて却うへき西国廣小路の森庵ふ本所ゑて出
張する筆造てあうとして製造らせたうふ西粗
の上ゑなて大凡粗毛の粗漏なく且價格も中ゑ



けはいは日傳うを傳達をしふおのく乗い造ら
をうてあう日器上のを絵をえて云うはもまを
あいをて其の筆面を鮮そる其似したるハ我ふ
うら松ちうをき其後日向恵生の一人海外人
ふ緑故あてうしうも只一本の鶴東油絵筆を持出
て吹聴あてうしう財者其の細工の粗物と感嘆い
つはを用を彩をうてうう後ふおうへハ白玉軸
の磨古筆ふてあてき支うてうう日月を経て海
外へ使節取と発したうふ係う言葉うて云号せ
らはたう油絵彩料筆刷油漆諸器械ふ長持入ふ

て画面へ表すたる時は學生各自の品物より
さらに森收張をなし多信の虚ねなどに過ぎ
るもこれふ過きしと評しあるを今更おもふへき
云の如し云く
又按ずに西洋画の種類甚多し油画あり石板画あ
り銅版画あり水彩画あり鉛筆画あり画きたる
毛筆画あり画きたるあるまゝ島城のそこみて画
きたるあり云ふして其の流派も亦多きうる
へし他日專門家に物き聞き得て細ふ論ずべし
余嘗英人濱已達氏の赤ふおまして英人某の著ふ
て西洋の画類と題し解説を附したるものを又
たゞ今其の書名と共を遺憾なり